



春独特な味

春来たる(中)

思う。老夫婦二人暮らしには無縁のものだ。一番下の女の子と目が合うと、向こうから「おはようございます」とあいさつ。そういえばこの兄弟、三人とも最近、急に背が高くなったように思える。「新学期から何年生?」「四年生です」「お兄ちゃんとお姉ちゃん」

「高校生と中学生になりました」

「この前、小学生になったと思っていたのにもう四年生。蚊の鳴くような声で、お母さんに言われてやっと」おはようございます、おはようございます、おはようございますと、言っていたのに、大きな声で自分からあいさつする。何と成長の早いことか。芽吹きの新学期、顔をだし、春を告げてくれる。

「自然の営みとの交わりは何の付度(そんたく)も必要なく、気持ちが安らぐ」と書いた。しかし、それは建前で、自分は老いて社会から取り残され、何かいらいを感じるといふことの方が本音かもしれないと思う。

「そういえば、春になると食べる野生のものに、苦味やえぐ味など独特な風味があるが、それも私の気持ちを表してくれているのかもしれない。」

「中でも私が好むのはフキノトウの苦味だ。団地を造成する時に山を削って出来た法面に、野生のフキを根から持ち帰って植えた。今ではフキ畑とまではいかないが、ウグイスとともにフキノトウが顔をだし、春を告げてくれる。」

「自然の営みがある。上のはラオスの土産に桑茶を送ってくれた。何かこれらには共通したものがあるように思える。」

「スピーディーで便利な世の中に年寄り取り残され、年寄りの味が粗末に扱われ、何か施設の中に閉じ込め、テレビづけのような気がする。」

「春の旬の味が違うように、長くその営みの中を生きて来たお年寄りの味を大切にしたいと思うのである。」

庭で草を取っている家が目立ち始めた。それとお隣りの四人兄弟の下の二人の女の子が道路でパドミントンを始めた。

家が自立し始めた。そんな中でお隣りの四人の子供と近所の三人の兄弟は団地内の平均寿命を若くしてくれてい

私が住む団地が造成されたのは昭和四十年の中ごろ。当時、家を建てた人は高齢となり、一人暮らしや空き

そのうち、上のお兄ちゃんもパドミントンに加わる。改めて「あくような声で、お母さんに言われてやっと」おはようござ



法面に広がるフキは子供たち



少し開き過ぎたフキノトウ